

財団法人

住吉隣保館ニュース

No.2

■編集・発行 財団法人住吉隣保館

■編集発行人 友永健三

財団法人住吉隣保館 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東5-3-21

TEL 06-6674-3732 FAX 06-6674-7201 <http://www.sumiyoshi.or.jp/>

市民交流センターすみよし北・特別事業

この号の内容

- 1 市民交流センターすみよし北特別事業『住吉と萬葉集』(1)～(8)
- 2 財団法人住吉隣保館の動き(8)

～住吉さんと地元の1800年から学ぶ～

住吉と萬葉集

～その後の和歌の世界にふれて

講師 村田正博さん(大阪市立大学文学部教授)

4月16日の上田正昭京都大学名誉教授・世界人権問題研究センター理事長の特別講演「住吉さんの1800年と地域の文化」をうけて、2011年度の大阪市市民交流センターすみよし北の特別事業「住吉さんと地元の1800年から学ぶ」の講座が始まった。

5月11日13時30分から、第1回として、村田正博大阪市立大学文学部教授に「住吉と萬葉集——その後の和歌の世界にふれて——」と題してお話し頂いた。友永健三財団法人住吉隣保館理事長の司会で進められたが、パワーポイントが駆使されたり、途中で住吉の松に掛けて、『京鹿子娘道成寺』の冒頭「花の外には松ばかり」が長唄七世芳村伊十郎の名調子で流されるなど、分かりやすく楽しく、時間を延長してお話し頂いた。

以下、お話の要旨を事務局でまとめたものを先生に補っていただいた。なお、引用の歌番号は、『国歌大観』番号(いわゆる旧番号)を用いることとする。

航行の起点として ——遣唐使の場合 ——

住吉大社ご鎮座1800年記念の行事の一つとして、こうした機会をお与えいただきましたことに感謝しております。本日は、萬葉の和歌を中心に住吉がどのように詠まれているのかについてお話ししたいと思います。

住吉は『萬葉集』では「スミノエ」です。入江のことを指す「エ」に「吉」という字が多く当てられたため、後世(平安時代)、「スミヨシ」と称されるようになりました。「スミヨシ」とは、まことによい地名で、一種の理想郷としての意味を持ってきます。これについては後ほどまた触れます。

まず萬葉の時代、住吉は、航行の起点でありました。石上乙麻呂が土佐に配流される時の歌にもここから乗船するむねを伝え(萬葉集巻六-1020・21)、東国の防人たちも、ここに集

結して船で九州へ向かったことが詠われていまして(巻二十-4408)、さまざまな船がここから進発したと推察されますが、もっとも注目されますのは、この住吉の津から遣唐使を乗せた船が出る定めであったということだと思えます。

天平勝宝二年(750)九月、遣唐使が任命されました(第10次)。大使が藤原清河、副使は大伴古麻呂らで、翌年、饞別の宴が開かれました。その時の歌が『萬葉集』巻十九に収められています。

春日にして神を祭る日に藤原の太后(光明皇太后)の作りたまふ歌一首

即ち入唐大使藤原朝臣清河に賜ふ

おおぶね まかぢ ぬ あご
大船に真梶しじ貫き この吾子を

からくに や いは
唐国へ遣る 齋へ神たち (4240)

大使藤原朝臣清河が歌一首

春日野に齋くみもろの梅の花

栄えてあり待て 還り来るまで (4241)

奈良の春日で神を祭る日に、光明皇太后がお作りになって、それをそのまま遣唐大使清河にお与えになった歌、そうしてその折に清河が作った歌と題詞に伝えられています。

第一首、皇太后の歌では、冒頭に「大船」と「船」の字が使われています。「船」は大規模な船のこと。遣唐使は「四船」で行くのですが人数も多いし大海を越えていくのですから立派な大きな船で行きます。その「大船」に梶をたくさん取り付けて、私の愛しい子(清河)を唐国へ遣わします、どうか前途を守ってください、神々よ一、そう祈願なされた歌です。

春日で詠っているのですから、「齋へ神たち」の中心に春日の神がいるのは確かでしょう。しかし、「神たち」というのは、春日のもろもろの神だけでなく、おそらく船出するここの住吉の神も含めて詠っているのだと思います。

この皇太后の歌を授かった清河が歌をのこしています。第二首がそれです。「みもろ」とは神のいますところ。春日野におけるそれは御蓋山(後述)で、そこにいますのは、皇太后が祭られている神であり、清河は、その「みもろ」の梅の花よ自分たちが使命を果たして無事に帰ってくるまで咲き栄えて待ってておくれよ、と詠っています。もちろん、そう詠うことで、ご神意に守られて無事に任務を終えて帰還を果たせるように祈念をこめたもので、この日は梅が咲いていて、おそらく皇后の歌は梅の花を添えて与えられたんじゃないかと思われます。

この二首に続いて、大納言藤原家(仲麻呂邸)において遣唐使らを饞する宴の日の歌が三首、併載されています(4242~4)。送る主人仲麻呂の歌(4242)と送られる清河の歌(4244)の間に、住吉の神の言葉を伝える多治比土作の歌が見えます。

すみのえ いつく はふり かむごと
住吉に 齋く 祝が神言と

行くとも来とも船は早けむ (4243)

住吉の神をお祭りしている神官から授かってきた神様のお言葉として「遣唐使船が行くといっても帰って来るといっても船はすすいと進むであろう」と披露しているのです。

神官が神様から得た言葉、これは、言葉の魂・言霊を持ちます。遣唐使らを送る宴でこの言葉を示すことによって、この言葉はちゃんと力を持って実現するというわけです。遣唐使は「四船」で行きますが、四艘とも無事に向こうへ着き、全ての船が無事に帰り着くとは限らないのが実情でした。そうであるからこそ、航行を前にした人びとに、神慮はかくのごとしと伝えたのがこの歌です。仲麻呂邸での宴が済むと、遣唐使らはほどなく難波に下り住吉から出発することになる一、そんな気配も感じられま

す。
仲麻呂邸での宴は、大使清河の歌で結ばれています。

あらたまの年の緒長く吾が念へる

児らに恋ふべき月近づきぬ (4244)

これは恋歌ですね。「おもふ」に当てられている「念」の字は、引き続く思い、悪く言えば執念というような一日二日で消えないおもいを表わします。私が長年ずっと心の中に念い続けている彼女(妻・恋人)に逢えなくなり恋しく念う月、すなわち遠い唐国への出発の月が近づいてきた、というのです。

出発の月が近いらしいことがこの歌からも分かります。今はまだこの国に居て、妻や恋人に逢うことができる一、しかし出発してしまえば、絶えて逢えなくなります。逢えないで切ないという思いが恋なんです。幸せいっぱい・夢いっぱいの恋は明治幾年かからこっちの恋で、それ以前は、思っても逢えない、かなわぬ切望が恋なのです。

恋歌に仕立てられたこの歌は、饞別の宴の主人らに対して、「あなた達と別れるが悲しくてもの思いをすることになりますね」という思いをこめたものと読むべきで、満腔の思いを披瀝してその日の結びの歌としたのでしょう。

以上、遣唐使に関わる二つの饒別の歌群は、この時(天平勝宝三年)越中に赴任中の大伴家持が伝聞により記録したものです。記録は、しかしそれにとどまらず、十五年余りをさかのぼる天平五年(733)の遣唐使(第9次)に関わる歌をも記録しています。

天平五年、入唐使に贈る歌一首 并せて
短歌 作主未詳

そらみつ大和の国 青丹よし平城の京師
ゆ おしける難波にくだり 住吉の御津に
ふなの 船乗り ただ渡り日の入る国に 遣はさる
るわがせの君を 懸けまくのゆゆし 恐き
すみのえ 墨吉の吾が大御神 船のへにうしはきい
まし 船どもにみ立たしまして さしよら
む磯の崎崎こぎはてむ泊まり泊まりに
荒き風浪にあはせず 平けく率てかへり
ませ もとの国家に (4245)

反歌一首

沖つ浪 辺波な越しそ 君が船

こぎかへり来て津に泊つるまで (4246)

大和の国の平城京から、たぶん龍田山を越えてだと思いますが、難波にやってきて住吉の神の港で船に乗って、まっすぐ西のかた太陽の沈む国(唐)へ遣わされるあなたたちを、言葉にかけるのも恐れ多い墨吉の我らの大御神が、船の舳先で進路を開かれ、船の艫にお立ちになって守りの役目を果たされて一、これから瀬戸内海を下って博多から大海を渡っていくわけですがけれども、途中に寄るどの磯の崎でも、停泊するどの港でも、荒い風や浪にあわせないで、どうかご無事に四船を率いてもとの大和朝廷に帰還を果たされますようにと、住吉の神に加護を祈る長歌。

反歌は、沖の波も岸辺の波も船べりを越すでない、あなたたちの船がこの住吉の津に漕ぎ帰って来るまで、と帰着点までの航行の平安を詠っています。

天平勝宝年間の遣唐使を送る歌にちなんで、こういう歌が十五年ほど前に住吉のここで

無事を祈る歌がもっと詳しく詠われたことを知ることができる、貴重な記録です。

住吉についての歌ではないのですが、天平五年次の歌がもう一首伝わっています。よい歌なので紹介させてください。

あべのあそみおきな
阿倍朝臣老人が唐に遣はされし時に母に
奉りて別れを悲しぶる歌一首

あまくも 天雲のそきへの極み 吾が念へる
あ おも
君に別れむ日近くなりぬ (4247)

この歌の「君」はお母さんのことを言っています。遙か果ての国、唐の国へ向けてもう数日で、心にずっと念い続けているお母さんあなたとお別れしなければなりません、というのです。以上、三種の遣唐使歌群を記録したのは、当時越中(富山)の国守として、現在の高岡附近の役所に赴任していた大伴家持です。平城の都でこういうことがあったと伝え聞き、資料として手に入れて『萬葉集』に編み込んでくれました。「右の件の歌(4240~7)、伝誦する人は、越中の大目高安倉人種麻呂これなり。但し、年月の次は聞きし時のまにまにここに、ここに載す」という左注が、その事情を伝えています。

さいわい家持が越中で記録にとどめてくれた三種、都合八首の歌群は、『萬葉集』巻十九、天平勝宝三年(751)四月十六日から七月十七日の間に記録されています。当年、都でこういうことが行なわれたという今あったこと、そして天平五年(733)にこんな歌があったことを伝誦する人がいて、それを家持が記録してくれて、現在、私たちが読むことができるのです。

「春日にして神を祭る日」

ただいま読みました三種八首の歌群から、萬葉の時代、遣唐使が任命されると春日の神のもとで航行の無事を祈ることがあったこと、そして、その船出は「住吉の御津」からであったことが知られますね。

春日で神祭をして遣唐使の無事を祈ったというのは、後世に三笠山ともいう若草山よりも少し南、春日大社の東にあるこんもりとした御

かきやま
蓋山でのことで、光明皇太后の清河送別の折に限らず、古来、そうしたしきたりがあったのでした。

もろこし
唐土にて月を見てよみける 阿倍仲麿
天の原ふりさけ見れば春日なる
みかさの山にいでし月かも

『古今和歌集』巻九、羈旅歌、406)

百人一首にも採られた有名な歌です。この歌は、大和のみかさやまの山の月を眼前にして詠んでいるようですが、詞書に「唐土にて」とあるとおりに、大唐帝国で作られたものとして理解が求められています。いま唐にあって、あのとき、みかさの山に「いでし月」を思い出して詠んでいる—、現実には目の前に月が出ていてもいいんですが、何年か前にみかさの山に出た月を詠っているのです。

この歌には、次のとおり注がついています。

この歌は、「むかし、仲麿を唐土にものならはしに(学問のために)遣はしたりけるに、あまた(数多)の年を経て、え帰りまうで来ざりけるを、この国より又使ひまかりいたりけるに、たぐひてまうで来なむ(同道して帰国しよう)とていでたちけるに、明州といふ所の海辺にて、かの国の人(唐土の人びとが)うまのはなむけしけり(送別の宴を開いてくれた)。夜になりて、月のいとおもしろくさしいでたりけるを見てよめる」となむ語り伝ふる。

仲麿が遣唐使の一員に加えられたのは、霊龜二年(716)任命、養老元年(717)に渡唐した第8次のことです。彼は唐国でもその力量を認められ、ついにかの地で生涯をおえることになるのですが、この歌は、天平勝宝の第10次遣唐使清河らとともに帰国することを許可されて、じつに三十数年ぶりの大和を思い描いて詠んだものと伝えられているのです。「明州」は、現在の寧波。杭州湾を隔てて上海の対岸にあたり、古来の良津。ここでの帰国饯別の宴の夜、海上に昇った月に寄せて、「みかさの山にいでし月」を詠みました。

注目すべき記事が『續日本紀』巻七、元正天皇の養老元年(717)二月一日に伝えられて

います。「遣唐使が蓋山の南に神祇を祠る」とあるのです。養老元年の遣唐使というのは、まさに阿倍仲麿がその中に加えられた第8次のそれにほかならず、「みかさの山」が仲麿の心象として深く刻まれた契機がここにあったのではないかと思われることです。

『續日本紀』の記事が「二月」にかけられていることにも目がとまります。先に申し上げた天平勝宝の清河の歌でも「梅」が咲いていました。季節が合います。

『續日本紀』には、もう一つ、「遣唐使が天神地祇を春日山の下に拝した」という記事を見出すことができます(巻三十四、光仁天皇、宝龜八年二月六日。なお、講座当日の資料にこの記事を「宝龜七年二月戊子(六日)」としたのは誤り。訂正します)。この遣唐使は、宝龜六年(775)六月に任命されましたが、天皇より遣唐大使(佐伯今毛人)が賜った節刀を返還したり、副使が交替したり、その上に天候にも恵まれなかったらしく、なかなか渡唐することが出来ませんでした。「天神地祇を春日山の下に拝した」という先の記事に続けて、『續日本紀』に次のとおり記されています。

去年、風波調はずして渡海すること得ず。使人も亦復頻りに以て相替る。是に至りて副使小野朝臣石根、重ねて祭祀を脩む。副使小野石根は、病を称してついに渡唐しなかつた大使の代行をつとめた人、その人が中心となって「重ねて」祭祀を修めたとは、すなわちこの日の「春日山」での神祇拝礼が、彼らにとって初めてのことでなく、前年(宝龜七年)にも、おそらく二月を期して行われたものであったことを示しています。

春の二月、梅の咲く春日で、春日山、その御蓋山のふもとで神祇を拝して、その航行の無事を祈ったことが知られます(杉本直治郎『阿倍仲麻呂伝研究』等参照)。

すみのえ みつ ふなの
「住吉の御津に船乗り」

さて、次に遣唐使の船出が「住吉のみ津」からであったことについてお話を進めたいと思います。

大宝元年(701)一月に任命された遣唐使(第7次)の歌が『萬葉集』巻一に伝えられています(62・63)。その一首は、次の歌で、ご存知の方も多いいと思います。

やまのうへのおみおくら もとづくに
山 上 臣 憶良、大唐に在りし時に本郷を
おも
憶ひて作る歌

いざ子ども 早く日本へ やまと 大伴の御津の おほとも みつ
浜松 待ち恋ひぬらむ (63)

憶良が大唐でふるさとを憶って作ったという、「憶ふ」は深く思いを寄せる意で用いる字です。歌の第一句「いざ子ども」は、光明皇太后の歌にも「この吾子」と清河に対して慈しみを込めて言われていましたが、この場合は、一緒に中国へ渡った同輩達に対する一体感を込めて言ったものと思います。さあ諸君、一刻も早く日本へ、大伴(大阪の住吉あたりの地名)の神聖な船着き場の、あの出発してくる時に見かけた浜松も待っているだろうと詠っているのです。「やまと」に原文「日本」が当てているのは、いま彼らがいる「日没む処」(中国)に対して「日出づる処」という思いが込められていて、そのなつかしい大伴の浜では、「浜松」が「まつ」という名のとおりに、ぼくらを待ち焦がれているだろうと詠って、もちろん、松の木ばかりが「まつ」じゃない、妻や子どもたちが待ってるぜとシヤレてみせた歌で、その内容から、任を終えて帰国する際の、仲間内の祝賀会的な場での作と見えますね。

この「松」が、ほかならない、住吉の松であります。

憶良は、この遣唐使に少録(書記の一員)として加えられました。既に四十二歳、まだ「無位」だったと書いてあります(『續日本紀』巻三、文武天皇、大宝元年一月二十三日、遣唐使任命記事の最末尾)。四十二歳って、昔の人の年齢を今の感覚に換算するにはおよそ1.5倍すればよいようですから、四十二歳は六十三歳

という勘定で、憶良は、その年齢で、まだ無位だった一。

憶良は、奮闘、任務を励行したにちがいありません。

この時の遣唐使が唐の国に着いた当初、どこから来た使いかと問われ、日本国の使いであると答えたところから問答が始まって、その問答がほぼ終わったとき、唐人が我が使者に言うことには一、よう耳にしていました、東の海上に大倭国があり、君子国であるらしく、人民が豊かで楽しく暮らしていて、礼儀あつく行われるとか。いま使者のあなた達を見受けるに、儀(服装)容(顔つき)ともに誠に清々しく、聞いていたことは本当だった!、そう言ってその人は去って行ったという記録がのこされています(『續日本紀』巻三、慶雲元年(704)七月一日、遣唐使帰国の条)。

日本の使節がむこうでどんな風に待遇されて、どんな評判であったかということがわかる一節です。そうした風貌をよく具えた仁で憶良があつたことが思われますが、その任務を尽くした最後に近い或る日、ちょっと羽目はずして安堵と笑みとで描き出してみせたのが、「御津の浜松」を詠う憶良の一首であると思います。

住吉は松の名勝

古来、住吉の岸や浜が見事な松で知られる名勝であったことは、昨秋、大阪市立美術館で開催された「住吉さん 住吉大社 1800年の歴史と美術」で拝見した屏風や調度に多く描かれていたことからわかります。

『萬葉集』でも、

つの
角 麻呂が歌四首(その第四首)

すみのえ とほ かみ いでまじところ
清江の岸の松原 遠つ神我が王の幸行 処
(巻三 - 295)

撰津作

住吉の沖つ白浪 風吹けば来依する浜を
見れば浄しも (巻七 - 1158)

住吉の岸の松が根 打ち曝し縁せ来る浪
の音の清けさ (同 - 1159)

など、その松原が歴代の天皇がたのお気に入りスポットであったこと、白浪の寄せるまことに清浄な海岸で、露出した松の根を打つ浪の音が胸にさわやかにしみる景勝の地であったことが詠われています。

『古今和歌集』では、巻七、さる貴人の「四十の賀」(1.5倍すると60歳、今日の還暦に当たります)のお祝いの席の様子が伝えられています(357~63)。「四季の絵」の描かれた「屏風」が後ろに置かれ、^{きのとものり}紀友則・^{つらゆき おほし か ぶちのみ}紀貫之・凡河内躬恒・^{つね さかの うへの これのり}坂上是則・^{そせいほふし}素性法師という当時のベストメンバーがそれぞれの屏風に歌を寄せています(もちろん、屏風の図柄に相応の季節・景色の歌で、屏風の絵に書きつけられたのでしよう)。本日お話ししたところでは、「春」の歌として春日野の神祭り、

春日野に若菜つみつつ ^{よろづよ}万代を
いはふ心は神ぞ知るらむ
(素性法師、357)

そうして「秋」の歌として、

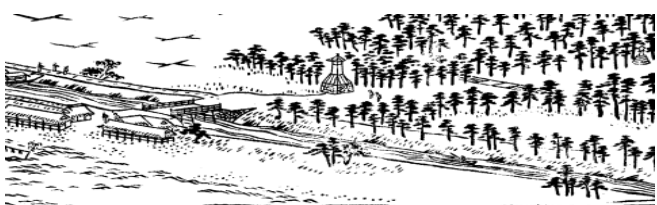
^{すみのえ}住江の松を秋風吹くからに
声うち添ふる沖つ白浪(躬恒、360)

春と言えば春日野の若菜(はやく『萬葉集』にも詠まれています、巻十-1879)、秋なら「住江の松」という伝統が引き継がれているわけです。

大唐で憶良が詠んだのは、彼等に乗せた遣唐使船がそこで無事を祈って旅立った、それを見守っていた、ここ住吉の松であった—、それぐらい深く長く印象に刻まれたものであったことに理解が届きます。

ご参考までに、『撰津名所圖会』が伝える住吉の松原をご覧ください(巻一)。

高灯籠(鎌倉時代末期に住吉大社への献灯と



して建てられた日本最古の灯台)が描かれ、あの向こうが海だったのですね。明治三十四年(1901)の『續近畿名勝寫真帖』所載のそれ、そ

うして現在、その約東200メートル附近に復元されています(昭和四十九年(1974))。



松のほかには

花の外には松ばかり、花の外には松ばかり、暮れそめて鐘やひびくらん、…

これは『京鹿子娘道成寺』ですが、では、ここ住吉では、「松」のほかに知られていたのは何だったのでしょうか。

道知らば摘みにもゆかむ ^つすみの江の
岸に生ふといふ ^お恋忘れ草 ^{こひわす}

(紀貫之、『新撰和歌』巻四、恋雑、340)

住の江の朝満つ潮にみそぎして恋忘れ草摘みて帰らむ(貫之、『貫之集』、巻一、37)

恋とは思いのかなわないうるな苦しきだつたことは先ほど申したとおり、そうした憂鬱を忘れさせてくれる草、それが「恋忘れ草」で、ここ住吉に来たらぜひそれを摘んで帰ろうということです。

貫之が土佐に国守として赴任して、娘を亡くしたりもするのですが、任期を終えて都に帰って来る、その道中の日記『土左日記』にも見えています。承平五年(935)二月五日、ちょうどその船が住吉のあたりにさしかかったとき、ある人がこう詠みました。

いま見てぞ身をば知りぬる ^{すみのえ}の
松よりさきにわれは経にけり

いま、住吉で名高い松を見て我が身のことがよくわかった、いつまでも緑を保つその松よりも先に私は年をとって白髪になってしまったのだと、そうわかった、と。白髪になったのは、旅先で子どもを亡くしてその哀しみの余り、ということです。これに続く、亡き子のことを一日片時も忘れない母の歌。

^{すみのえ}に船さし寄せよ 忘れ草
しるしありやと摘みてゆくべく

緑かわらぬ松だけを見て、通り過ぎようというのですか—、住吉の岸に船を寄せておくれ、き

きめがあるかどうか試しに「忘れ草」を摘んでいくことができるように、というのです。

「恋忘れ草」・「忘れ草」と詠まれているのは、憂いを忘れさせる効能があるとされた薬草の萱草かんぞうです。中国の『文選』(梁の昭明太子撰)巻五十三に載る晋の嵇康「養生論」の記述がよく知られています。

合ねむ歡いかりハのぞ忿のぞヲのぞ蠲のぞキ、萱草ハ憂ヲ忘ル。愚智(愚者・賢者)ノ共ニ知ル所也。

合歡と萱草と、すごい薬効ですね(飲ませたい人、飲みたい人がおありでしょ?)。その「忘憂」に効く「忘れ草」、とりわけ恋の苦しさを忘れさせる薬効に対する願望を込めて、住吉の岸に生える「恋忘れ草」を詠む歌がどっさりのこされています。

「松」のほかには「恋忘れ草」—、この二つがこの土地を代表する植物です。他の植物が葉を落としても「松」は枯れない、長寿の象徴ですし、「忘れ草」は憂いを忘れさせ、こころの鬱屈をとり除く妙薬だというわけです。この二つが住吉を代表する植生—、そこから転じて、次のような発想の歌が生み出されました。

松=長寿 萱草=忘憂より転じて

住吉での出来事として「水江の浦の嶋子を詠む歌」が伝えられています(『高橋蟲麻呂歌集』所出、『萬葉集』巻九-1740~41)。

(以下紙幅の関係で、長歌の書下し文の引用を省略。事務局)

春の一日、ここ墨江すみのみえの岸で沖行く釣り船を見ていると、思い出される故事がある、と歌は始まります。その故事というのは—、この入り江に住んでいた青年「浦の嶋子」が釣りに出て、なんと堅魚かつおや鯛がじゃんじゃん釣れて夢中になり、七日間釣りっぱなしで家にも戻らず、海界うな(海の、こちらがわとむこうがわの境界)をつい越えてしまった、それにも気づかず漕いで行くと大海の神様の娘の乗る船と遭遇、コミュニケーションが成立したので、二人はラブラブで常世とこよ(不老不死の永遠の世界)に至り、大海の神様の宮殿の、奥の御殿で暮らすことに—、

かくて、老いもせず死にもせず、永久の命を恵まれたというのに、この世間で一番の愚か者(その結果が以下のようにまことにまづかったものですから、がまんできずに「世間の愚か人」って言っちゃったんですね)が妻に言うことには、「ほんのちょっとの間、家に帰って、こうした事情を父母に語り聞かせて安心させ、ほん明日にでも戻って来っから」と、そう言うところ、妻が答えて言うには、「常世の国にまた帰って来て今のように夫婦として暮らそうと思うなら、このくしげ筐くしげ(櫛などを入れる美しい小箱)を持たせますから、けっして開いちゃだめよ」って。いわゆる玉手箱です。

ところが、あんなに堅く約束したのに、墨吉に帰って来て、家も見つからず、家どころか里も見つからず、合点しかねて思案顔、家を出て三年の間に、垣根もなく家なくなるものやろか、この箱を開いて見たら、もとのように家があるんじゃないかと、箱をちょっと開いた、その途端、もやもやもやと白雲が箱から出てきて常世の方へたなびいた、ああっと立ち走り出し、叫び、袖振り(たなびき去った白雲を箱の中に戻そうとしたのでしょう)、転げ回り、悔しいと足摺りして失神する始末—、若かった肌も皺だらけ、黒かった髪も白くなり、やがて、息も絶え絶え、ついに死んでしまったという、その水江の浦の嶋子の家のあった所がこの辺りだったんだ…、と長歌が詠い納められています(1740)。

反歌

常世とこよ辺へに住むべきものを 剣刀つるぎたち

汝ながこころから鈍おそや この君(1741)

不老不死の常世に住むことができたはずなのに、こんな結果になっちゃって、とんまなお兄さんというわけです。

「剣刀」は、刃の部分なを「な」と言うところから(諸刃ではなく、片方にだけ刃があるのが「かたな」ですね)、「汝がこころから」を導く枕詞とされています。「こころから」の原文は「行柄」。「行」は行動(いまの場合、とんまな行動)ですが、ここはその行動のもとになる心根(いまの場合、とんまな心根)を含めて、「行」の文字で「こころ」

に当てたものでしょうか。『萬葉集』で、たった一例しかない工夫です。「から」は、そのせいで。原文「柄」は、上の「剣刀」と連想がはたりますね。

以上、この歌からわかるのは、ここ住吉が「常世」とつながる土地という側面をもっていたらしいということです。

住吉の御津は、ここから船を出して、遙かな唐の国まで達する、その起点だったということ。住吉の岸には、長寿を象徴する松と現実の苦悩をいやす忘れ草が生える、一種のユートピアを髣髴させる土地でもあったということ。こうした土地がらより、ここは常世の国に最も近いところという発想が生み出されたのではないかと考えられます。

だからと言って、ここから出発すれば誰でも常世に至ることができたかという、そうではなかった—、浦の嶋子の失敗は、凡愚の衆を代表してしてくれた失敗であって、念願は念願、理想は理想であるがゆえに、いっそう人びとの憧憬をかきたててやむところがなかったということなのでありましょう。

本日、「住吉と萬葉集」というテーマでお話ししようとしたしたのは、古典和歌を通してみる住吉の実態と、そこから発想された、この土地に寄せられた古人の願望の一端ということになろうかと存じます。

前回、上田先生のご講演の折に出た和歌と住吉のつながりは何だったのかという質問について、本日まで改めて思案してきましたが、むつかしいというのが正直なところです。ですから、本日の趣旨から考えることができる、精一杯の推測を申し上げるにとどめるしかありません。本日お話しいたしました、この土地が、常世とか不老不死という憧憬の世界に繋がらう場所であるということをつきつめてゆくなれば、清河や貫之や躬恒らの人生は有限でしたけれども、私たちは彼らの残した歌を読み、その思いにふれることができる—、現在の私たちの想像力をはたらかせれば、まるで彼らがここにいるかのように貫之の歌を深く理解することができるわけです。彼らが桜を詠んだ歌があると、千年以上隔たった桜であっても、それが

いかに美しかったか、私たちは、もう一度自分たちのものにすることができるのです。和歌というのは、その時、その場で生み出されながら、時間や空間を超越して私たちが追体験できるわけで、和歌とは、有限なる私たちにとって、無限の生命力を勝ち取る一つの手段であると私は思います。

そう信じて、七世紀・八世紀の歌『萬葉集』を、この二十一世紀に研究しています。「私たち有限の存在が無限の世界に繋がる手段が和歌である」という和歌の本質、それが住吉の土地がらにぴたっと合うと思念せられたのではないかということです。ただし、これは必要条件です。三輪明神をはじめとする多くの神々の中で、なぜ住吉明神なのかという、十分条件をお示しすることは、まだできません。

いつかまたお目にかかる折に期して、本日は、このあたりで精一杯とこらえていただけますならば幸せです。

財団法人住吉隣保館の動き

2010年度事業報告・決算報告が評議員会及び理事会で承認

さる、5月29日(日)市民交流センターすみよし北において午後2時から3時半まで評議員会が、4時から5時半まで理事会が行われました。今回の理事会、評議員会では、①2010年度の事業報告、②2010年度の決算報告、③新しく申請する公益財団の定款案の一部変更などが議論され、参加者全員の賛成で承認されました。

なお、2010年度事業報告としては、①昨年の4月より市民交流センターの指定管理の受託を受け取り組んだこと、②6月よりもと住吉青少年会館付設体育館の市民の供用が再開されこと、③2011年で財団設立50年を迎えること、財団の初代理事長であり住吉の地で部落差別をはじめとして人権の確立やまちづくりに大きく貢献された故住田利雄さんの生誕100年に当たることから、7月に「財団設立50年、故住田利雄さんの生誕100年」実行委員会が結成され、様々な取り組みが積み上げられてきていること、④財団の独自事業として各種相談活動が実施されたことなどが報告されました。

また、討議の中では、市民交流センターすみよし北の利用率(とくに日曜や祝日の)を高めること、子どもの遊び場や活動の場を確保していく必要性が指摘されました。

